八束橋文庫

詩集

火の鶴

一戸玲太郎

哀しみカシオペアにおの
門の晴に土軋れり
形を解き一に返せよ
喪の名なし石と語る

海のさとり荒れて黒し

たびよりの礼儀のむざんや

ゆつ木の花空に満ちぬ

ふるく雲の岸に倚かり

燃える髪のすがた立てり

知る形を散らす潮

問ひる駅庭裂けわり

死の蠱炎たいさなる

蛾、昼とても土くあさりけり

終りの日崖を断てり

伽藍をさし　さかるいかり

巨きなるうつろの流れ

死をまねく姿はあやしもり

つばさに乗り声は晴し

しろがねのくさりのかげり

罪朱く波にわたされり

仮りの虹はてなかり
かがられる身を陽に溶ける
かなしみ潜をとざせり
貝のことば足をさらす

樹は風のひかりまとへり
成る石と顔うすくなり
消える手と峰は分かり
名を雲にしるせるかぎり

去る年打ち鳥おちたり
啼る日は 背に血のつゆあり
涙とどめて恋よと立つ
覚めたる間 沖はいよよ

影にかたり絶えぼつ
風の上に安た放てり
寄すいつぼり裂くいなつま
呼ぶ雨は土は灰けし

引くしるべ草に淡し
ひとめし雲夜をたてへり
人すたなお砂とへだつ
火の傷世を偽けり

筋くだけ地にかつりなし
城白しひとりするごし
死さまを陽におもふなかれ
噴くひかり学白し

陽をめぐり淵をめぐれり

恵み行末に咲らむ

久しかり岩の穂を去れ

芽の誓ひ空にとたふ

（昭和十五年七月廿五日作）

「聯」昭和十五年九月号

火の諺

一戸玲太郎

哀しみカシオペアにおつ
門の暗に土軋れり
形を解き一に返せよ
喪ゆるなし石と語る

○

海のさとり荒れて黒し
たゞよふ禮儀のむざんや
卯の木の花空を滿たせ
高く雲の岸に倚れり

○

燃える髪のすがた立てり
知る形を散らす潮
悶ゆる蠍座裂けたり
死の靈炎をいざなふ

○

蛾星ともに吐くあざけり
終りの日崖を斷てり
伽藍をさしさかるいかり
巨いなるうつろの流れ

○

死を求め指はなやめり
つばさに乘り聲は暗し
しろがねのくさりのかげり
罪朱く波にわきたり

○

假りの虹悔はてなかり
かざられる身を陽に溶けよ
かなしみ渚をとざせり
貝のことば足をさらす

○

樹は風のひかりまとへり
成る石に顔うすくなり
消える手よ峰は白かり
名を雲にしるせるかぎり

○

去る年打ち鳥おちたり
鳴る星背に血の川あり
浪とゞめて戀よと立つ
覺めざる問沖たゞよふ

○

影にかたり花絶えはつ
風の上に世を放てり
寄すいつはり裂くいなづま
呼ぶ雨に土は仄けし

○

引くしるべ草に淡し
ひそめし雲夜を乞へり
人すなはち砂とへだつ
火の諺汝を說けり

○

笛くだけ地にみのりなし
城白くひとりするどし
死をまた陽におもふなかれ
噴くひかり掌白し

○

陽をめぐり淵をめぐれり
惠み行末に明らむ
久しかり岩の穗を去れ
芽の營み空にたゞたふ